

日時 10月3日（金） 12:30～14:55

会場 奈良県社会福祉総合センター 研修室 B・C

子どもの「自分らしさ」と「生きにくさ」をめぐって

登壇者

司会／問題提起：林 郷子（奈良大学 社会学部心理学科 教授）
 発表者： 狗巻 修司（奈良女子大学 文学部 准教授）
 飯田 順三（奈良県立医科大学 名誉教授、
 医療法人南風会 万葉クリニック子どものこころセンター 絆 センター長）
 奥山 志帆（郡山北小学校・郡山中学校分教室「ASU」主任）

○問題提起

林 郷子

本分科会での重要な課題は、生きにくさを抱える子どもたちをどのように支援していくかです。生きにくさの要因は多岐にわたりますが、今回は特に年々増加している発達障がいと不登校の二点に焦点を当てました。発達障がいは10人に1人はいるという報告があり、不登校に関しても本年度は34万人に達し、中学生では15人に1人という状況です。

このような状況に対し、課題への取り組みや理解は広がりつつあります。発達障がいについては、合理的配慮の義務化が始まり法律的な整備が進んでおり、支援機関も増えてきました。不登校に関しても、単に学校復帰を促すだけでなく、多様な学び方の保障という視点が重要視されています。例えば、現在、教育支援センターや学びの多様化学校など、さまざまな形の居場所や学びの場が提供されるようになってきています。不十分な点はまだあるものの、課題への取り組みは広がりを見せています。

今回のテーマに「自分らしさ」をセットとした背景として、相談に来られたお母様の言葉がきっかけにあります。生きにくさと自分らしさは表裏一体の関係にあるという問題意識を提示し、講演者や参加者とともに、子どもたちの視点に立ち、真の支援とは何かを考えていきたいと思えます。



○発表

「乳幼児の発達障がいと支援について」

狗巻 修司

1. 発達とは何か

発達障がいを理解するためには「発達とは何か」という根源的な問いを理解する必要があります。発達とは、単に成長することではなく、個人を取り巻く環境との相互作用を通して、その個人が質的に変化していくプロセスです。この発達というプロセスは、主に以下の3つの側面から構成され

ています。

- ①分化（専門化）：以前は一つの機能として働いていたものが、より細分化され、特化した機能を持つようになること（例：手を握る動作から、つまむ動作へ）。
- ②統合（複雑化）：分化された機能が、互いに協調し、より複雑な機能として働くようになること（例：目と手を協調させて作業を行う）。
- ③変容（脱中心化）：自分の視点だけでなく、他者の視点を考慮に入れ、状況に応じた行動ができるようになること。

これらのプロセスは、子どもが外界と関わる中で、絶えず環境からのフィードバックを受け取り、自ら変化していくことで進んでいきます。



2. 自閉症スペクトラム症（ASD）の特性と支援

ASDの子どもたちは、主にコミュニケーション、対人相互作用、そして限定的・反復的な行動や関心の分野で特性を持ちます。ASDの子どもたちのコミュニケーション研究から、彼らの行動は一見すると「こだわり」として否定的に捉えられがちですが、それは「自分の発達の安定化を図るための手段」として機能している場合があります。

例えば、特定のものを集めるという行動は、彼らにとって世界の複雑さを整理し、自分の発達を安定させるための「足場」となっている可能性があります。支援においては、この「こだわり」を否定するのではなく、その行動が子どもにとってどのような意味を持っているのかを理解し、その意味を尊重しながら、より社会的に適応できる形へ行動を「橋渡し」していくことが重要です。

3. 支援の原則：発達の「土台作り」

乳幼児期の発達支援は、すぐに目に見える結果を出すことだけが目的ではありません。この時期の支援は「土台作り」に例えられます。まずは焦らず、子どもが安心して成長できる環境という「土」を耕し、そこに支援という「種」を蒔き、水や栄養を与える。そして、芽が出て花が咲くのを待つという姿勢が、長期的な発達を見据える上で非常に重要です。

早期発見・早期支援は、研究データからもその効果が裏付けられており、もちろん重要ですが、それはあくまでも早期の対応をセットで行う必要があることを意味します。大切なのは、短絡的な成果を求めるのではなく、長期的な視点で子どもの可能性を信じ、成長を支え続ける姿勢です。

【中学生から増える不登校と思春期の神経発達症】

飯田 順三

1. 子どもの発達の理解

かつて大人のミニチュアと見なされていた子どもが、独自の存在として認識されるようになったのは比較的最近のことです。

また、人の「心と脳」の関係について、主観的な思いは他者との相互作用、すなわち間主観性が確立されて初めて意味を持つようになります。子どもは、この他者との交わりの中で、言葉や感情の交換を通じて心を形成していくため、人との関わりが心の育ちに不可欠であると言えます。

2. 思春期の神経発達症と併存症

思春期・青年期における神経発達症（特に自閉症スペクトラム症：ASDや注意欠陥・多動症：ADHD）は、幼少期とは異なる形で現れます。

- 幼少期：神経発達症自体が主訴となり、病院に来院することがほとんどです。
- 思春期・青年期：自尊感情の低下に伴い、うつ病、不安障害、睡眠障害といった併存症・合併症を主訴として来院するケースが多くなります。診察を進める中で、その基盤に神経発達症が存在したことが判明するという経緯がしばしば見られます。

特に女子の場合、多動などの特性が目立ちにくいいため、小学校の頃は見過ごされがちであり、中学校になってから上記のような併存症をきっかけにASDやADHDであることが判明することが多いです。思春期の子どもは、自分が他の子と「ちょっと違う」と感じやすく、特に女子は友人関係の中で裏読み（空気を読むこと）が求められる状況が多く、それができないことへの悩みが深くなりやすいと考えられます。

3. 不登校と支援の必要性

不登校は、学校に行けないという状態であり、その背景には様々な要因があります。学校に行けない状態の子どもに対しては「不登校を治すのではなく、不登校を卒業する」という意識が重要です。

不登校からの「卒業」とは、必ずしも学校に戻ることを意味しません。多様な学びの場、例えばフリースクールや地域活動など、その子にとって居場所となる活動を見つけ、社会の中でうまくやっていける自信を回復することが、真の支援です。その子が「自分らしさ」を諦めずに、社会の中で自立して生きていく力を育むことが、最終的な目標です。



「郡山北小学校・郡山中学校分教室「ASU」の取り組みについて」

奥山 志帆

1. 「ASU」の概要と目的

「ASU」は、文部科学省に認定された「学びの多様化学校」であり、不登校児童生徒のセーフティーネットとなることを目的としています。心理的な理由等から通常の学校生活を送ることが困難になった市内全域の小中学校の児童生徒に対し、個々の実態に応じた段階的かつ丁寧な支援を通して心理的な不安の改善に努め、社会的な自立を支援し、教育の機会を提供することを目的として設置されました。

大和郡山市は、昨年70年目を迎えた歴史ある街であり、市内には11の小学校と5つの中学校があります。「ASU」は市の北部に位置し、市内全域の子どもたちを対象としています。

2. 「ASU」における支援の取り組み

「ASU」の建物の中には、「ASU」に入室する前に必ず過ごしてもらうあゆみルームがあります。あゆみルームは、「家から外に出る初めの一步」「家以外で安心して過ごせる場所」となるよう温かい居場所作りを大切にしている場所で、「ASU」正式生になるための入り口、大切な準備期間を過ごす場です。そして、「ASU」では子どもたちが「自分らしさ」を取り戻し、社会とのつながりを再構築できるよう、多様な支援を展開しながらも次の3つを重要な柱としています。

- 心の居場所づくり：土台となる部分で、子どもたちにとって安心して安全に過ごせる場所であるために、スタッフ一人ひとりが児童生徒としっかりと向き合い、それぞれの人間性や特性、家庭



環境や困りごとなどを常に把握するよう心掛けています。

- 豊かな体験活動：年間計画を立てて、さまざまな体験活動（例：校外学習、救命救急講座、野菜作り、調理実習）を実施しています。何よりも大切にしているのは、これらの体験活動をとおして、自己肯定感や自己有用感、自尊感情を高めること、また他者理解の力を高めることです。ただ活動を楽しむだけでなく、各活動の企画段階で、児童生徒同士のコミュニケーションが図れたり、社会性が身に付いたりするような様々な仕掛けを施しています。
- 進路保障：不登校生徒の場合、授業を受けていない期間が長いこともあり、学校での成績がつかず、高校への進学を望んでも受験できる学校が限定されることが多くあります。「ASU」では市内のほかの学校と同じように評価を行い、通知表に記載します。また、教科の評価評定以外に各教科の文章評価を別紙にて添えることで、数字では表れない子どもたちの努力を目に見える形で評価しています。「ASU」の成績で内申を作成してよいと認められており、ひとりひとりの希望や学力にあった高校、私立高校はもちろん、公立高校の受験ができます。

3. 課題と今後の展望

現在、全国的に不登校が増加し続け、社会問題となっています。実際に、学校に足が向かない、あるいは同年代の子どもに会いたくないなど、学校の環境自体が難しいと感じる児童生徒も一定数存在します。文部科学省は学びの多様化学校を全国に300校設置する目標を掲げていますが、学びの多様化学校の運営については、施設面や人員配置といった問題も残されています。

「ASU」は、このような社会から切り離されようとしている子どもたちと一人でも多く出会い、つながっていくことで、不登校児童生徒にとってのセーフティーネットとしての役割を今後も強化していきたいという強い決意が述べられました。多様な居場所の提供を通じて、子どもたちが安心して自己を確立し、社会へ踏み出せるよう、支援を継続していくことが今後の展望です。

○ディスカッション・質疑応答

(参加者からの質問)

先生方個人の考えを教えてください。狗巻先生には発達心理学の観点から私たち一人ひとりへのアドバイスを、飯田先生には増え続ける不登校への独自の意見を、奥山先生には「ASU」の課題を聞かせてください。

狗巻 発達段階というのはあくまで仮説であり、個人差も大きく、発達だけで説明できない要因もたくさんあります。ただ、支援していく中では、発達という観点から人を捉えていく必要性はあると考えています。

飯田 不登校について一番大事なのは、自尊感情を下げず、劣等感を持たせないことです。そのためは、待つことで本人の罪悪感を減らし、周囲が設定する目標の閾値をあまり作らず、本人のストレスにならないレベルまで下げ、それが達成できたときにしっかりと向き合ってもらえることが重要だと思います。

奥山 「ASU」の課題は施設面です。新しくきれいですが、小・中の全学年が同じフロアにいるため非常に狭いです。パーテーションで区切って授業をしていますが、隣の音が気になり落ち着かない子もいます。もっとゆったりとしたスペースで、各学年が落ち着いて取り組める環境があれば良いと感じています。

(Q&Aフォームからの質問)

保護者に対する心構えについて、気を付けていることなどを教えてください。

奥山 不登校の保護者は、学校に行けないことへの罪悪感や焦りを強く持っておられるので、まずはその気持ちをしっかり聴き、寄り添う姿勢を示すことを一番に考えています。保護者が安定することが、子どもの不登校からの復活の鍵になると思います。

(Q&Aフォームからの質問)

不登校の子どもがゲームに長時間没頭している場合、制限しなくても大丈夫でしょうか。

飯田 理想は本人の自由にさせてあげたいですが、睡眠時間確保のために、何時までならやめられるかを本人と相談して時間をかけながら少しずつ調整することが大事です。一方で、オンライン上の交流も他人との大切な繋がりですので、その部分は十分に評価してあげてもいいかなと思います。

(Q&Aフォームからの質問)

発達障がいを持つお子さんで特に知的障がいと重なる場合、気づかれにくいことがあると思いますが、そういった場合の早期発見、支援に繋げていくための取り組み等はあるのでしょうか。

狗巻 早期発見、支援が大切であるのは研究データでも示されている事実ですが、早くなければいけない、という意味ではありません。保護者が受け入れられない場合、保育園などから直球で伝えると関係が崩れてしまうこともあります。事実を共有しながら理解を深めてもらい、園や学校が「相談しなければならない場所」ではなく、数ある「相談先の選択肢の一つ」として機能することが重要だと考えています。



○分科会 5 提言

個々を大切にすることと社会とのつながりを育むことは相互に関連し合っていることを確認しました。

個々のペースに寄り添った支援を大切にしていくことをめざします。